BURRN! 2021年6月号　2021年5月5日発行・発売（毎月5日発行・発売）第38巻・第7号・通巻539号

BURRN!

THE WORLD'S HEAVIEST HEAVY METAL MAGAZINE

EXCLUSIVE INTERVIEW

KISS

NEW LIVE ALBUM OUT SOON!!

HELLOWEEN

★DIR EN GREY ★PRETTY RECKLESS
★BODOM AFTER MIDNIGHT

POSTER : AEROSMITH



KISS

ドバイでの年越し生配信ライヴを経て2021年を迎えたKISSから
『END OF THE ROAD』と題された最終ツアーの停止解除を前に届いたのは
新たなライヴ・アルバムを発表するという思いがけない一報だった。
そこで本誌は、ジーン・シモンズに緊急取材。
前号の誌面上、素顔でSOUL STATIONにかける想いを語ったポール・スタンレーに続き、
本誌史上初となる地獄の軍団・両巨頭2号連続巻頭独占インタビューをお届けする。
「OFF THE SOUNDBOARD:TOKYO 2001」なるこの音源の背景と、
今だからこそ語られるべき未来に向けての心中。そして、
「ロックン・ロールは死んだ」発言の真意とは?

AN EXCLUSIVE INTERVIEW WITH

GENE SIMMONS

ROCK'N'ROLL IS DEAD BUT ALIVE!

by YOU MASUDA

その舌を持つ男、ジーン・シモンズ。人一倍長くて器用な舌の持ち主でもある彼は、ときどき極端な物言いで誤解を招いたり批判を浴びたりすることがある。「ロックン・ロールは死んだ」という発言もそうした対象となったもののひとつだ。ただしこの言葉には前後の脈絡があり、間違っても若いバンド達を攻撃・非難するものではない。少なくとも「自分達の世代でロックン・ロールは終わった」と言っているわけではなく、その歴史を踏まえたうえで現状と未来を憂えているのだ。

日本時間の4月3日、そのジーンとZoomを通じてのインタビューが実現した。2019年12月に実施された"最後のジャパン・ツアー"は、その後に訪れた長過ぎるパンデミックのため、もはや遠い過去のことのようにも感じられるが、2020年の春以降は『END OF THE ROAD』と銘打たれたKISSの最終ツアーも一時停止状態が続いたままになっている。ただ、大晦日にドバイから生配信された強烈な最新ライヴ・パフォーマンスからも、彼らがこのまま歩みを止めようとしているわけではないことは確実に伝わってきたし、彼ら自身のヴィジョンも1年半前の来日時とまったく同じままではないはずなのだ。

今回の取材が実現したのは、この6月、KISSの新たなライヴ・アルバムが登場することになったからだ。しかもそれは『END OF THE ROAD』ツアーに伴うものではなく、なんと2001年3月の東京公演が完全収録されたもの。つまりポール・スタンレー<vo,g>、ジーン・シモンズ<vo,b>、エース・フレーリー<g,vo>とエリック・シンガー<ds,vo>という異例の顔ぶれでの演奏によるものだ。正直なところやや唐突な印象は否めないし「何故、今なのか?」という疑問も浮かんでくる。今のジーンに訊きたいこと、確かめておきたいことは多々あるが、まずはこの"20年前の音源による最新アイテム"に関することから話を始めるとしよう。



pic:Ross Halfin

──今日は本誌のために時間を割いていただき感謝しています。お訊きしたいことは多々あるのですが、まずは近日発売予定のライヴ・アルバムについて。「OFF THE SOUNDBOARD:TOKYO 2001」というタイトルからも、その収録内容が2001年3月13日に行なわれた東京ドーム公演だということは察しがつきます。あの公演から20年を経てこうしてCD化されることになったのは何故なのでしょうか?

ジーン・シモンズ(以下G):正直に言うと、そのライヴが録音されていることすら我々はまるで知らずにいたんだ。ロード・クルーから「安全の観点からこれまでのショウはすべて録音してある」と言われ、実際にその音源を聴いてみたら「ワオ!」という感じだったのさ。「我ながら、なかなかクールじゃないか」と思った。(笑) ならばせっかくの音源をブートレッグ業者に出させるのではなく、自分達で合法的にリリースしてやれということになったというわけだ。だから、オーヴァーダブは一切無し。後からダブルで被せて歌うようなこともまったくしていない。すべてがサウンドボードからの合法の音源だ。しかもニッポンでのものだ。(註:ジーンはジャパンではなくこう言った) ものすごく満足しているよ。

──無編集という言葉にも頷けます。音源を聴かせてもらいましたが、1本のライヴが丸ごと完全収録されていて、MCなどもそのまま残されています。そしてアートワークは非常にシンプル。ブートレッグという言葉が出ましたが、まさにそんな雰囲気が伴っていますね。

G:ああ、そのとおり。これはまさに、KISSが公認したオフィシャル・ブートレッグと言えるものだ。

──ご自分でも全編を聴かれましたか? 手直しをするつもりのないライヴ音源については改めて聴こうとしないアーティストもいるようですが。

G:勿論聴いたよ。ポールも、全編かどうかはわからないが大半の部分を聴いているはずだ。私は全曲聴いているよ。

──改めて20年前のライヴ・パフォーマンスに触れてみて、どう感じましたか?

G:どこを切っても間違いなくKISS。そう言える音源だな。ただ……ひとつ言えるのは私も含めてみんな当時は声が高かったな、ということ。こんな感じでね。(と言いながら、裏声交じりの高音で歌ってみせる) コホ、コホ。(ジーンは咳き込む演技も忘れない) そうした違いがあるとはいえ、正当な、本物のKISSのライヴ音源だ。すごくいい感じだ。

──2001年のジャパン・ツアーといえば、そもそもは「PSYCHO CIRCUS」アルバムに伴うツアーとして実施されるはずだったところ、結果的にフェアウェル・ツアーとなってしまった、というもの。しかも来日前にピーター・クリス<ds,vo>が脱退し、エリック・シンガーを急遽代役に迎えて行なわれたものでもあり、ある意味とても特殊な状況にあったと言えるはずです。

G:あれは単なる「PSYCHO CIRCUS」のジャパン・ツアーではなく、日本ならではの「サイコーデス・ツアー」だった。

──……。(ちなみに画面の向こうのジーンはドヤ顔をしている)

G:わかるよな? サイコーデス…!(笑) 確かに普通じゃない状況ではあったかもしれないが、窮地な状況だったわけではない。そんな状態に陥ったことは一度もないよ。何故ならKISSの場合、元々すべてが普通じゃなくて変だからだ。我々の施している化粧は、君が知っているご婦人がこれまでにしてきたどんな化粧よりも厚く、我々のブーツは彼女達が履いてきたどのヒールよりも高い。そして常に、自分達の道を貫き通してきた。KISSを好きだろうと嫌いだろうと、「KISSが他の誰かをパクった」などとは誰ひとり非難できやしないんだ。絶対にね。何故なら我々は常に自分達の方法論でやってきたからだ。言い換えるならば、特別な人間でなければあのステージには上がれない、ということでもある。フットボールのチームと一緒だ。日本の場合、野球に例えたほうが伝わりやすいのかな? チームにはスター選手というのがいるものだが、全員がそうだというわけではない。まるで打てない選手、駄目なミスばかり繰り返すプレイヤーがいたならば、そいつは即刻退場にしなければならない。バイバイを告げないとね。なにしろいちばん重んじられるべきは全体としてのチームであり、それはそのチームの一員以上に重要だからだ。

──当時、その素晴らしいチームが崩れかけていたわけですよね。かつてピーターは、「PSYCHO CIRCUS」のセールスが期待ほどではなかったことが同作に伴うツアーを早々に切り上げることになった理由だと語っています。また、2000年中をもって契約の切れていた彼が翌年度の契約更新をしなかったことがエリック起用へと至る経緯だった、との話も報じられています。実のところ、真相はどうなのでしょうか?

G:ピーターのことは愛していたし、その後も私達は彼を愛し続けた。ただピーター自身には誤った物の見方をするところがあり、業界誌を読むこともなければ、音楽業界がどうなっているのかを知ろうともしなかった。彼の気持も理解できなくはない。野球チームを追い出された人間は「俺が抜けたあとのチームは絶対に俺がいた時ほど強いはずがない」と思いたがる。それは誰もが思うことであり、ごく自然なことだ。ただ、あいにくそうした心配には及ばない。KISSにとっての最悪の日があるとしても、それは普通のバンドにとっての最高の日に等しいからだ。

──「PSYCHO CIRCUS」という作品自体について、あなたはどのように自己評価していますか? オリジナル・ラインナップ復活を経ての第一作というふれこみでありながら、実はエースとピーターがあまり制作に関与していなかった、ということをのちに明言されていますが。

G:そう。彼らはほとんど関与していない。ふたりは私達に対して弁護士をよこしてきた。だから言ったんだ。「アルバムで演奏したけりゃしろ。したくなければしなくてもいい。別の人間を探してくるから」とね。すると最後の最後、ギリギリのところで彼らは参加すると言ってきたんだ。エースとピーターのことは大好きだし、愛している。KISSのスタートにとって最も重要な2人だったとずっと思ってきたものだよ。ところが彼らは、いわば自ら自分自身の敵になってしまったというわけだ。その後の人生について彼らが下した決断は愚かなものだった。ガールフレンドに言われることを鵜呑みにして、弁護士を連れて来た。「バンドで一番大切なのはあなた。あなたにはその価値がある」という言葉を信じながらね。要するにジョン・レノンに耳打ちするオノ・ヨーコみたいな存在が彼らの身近なところにいたわけだ。「あなたが一番重要なのよ」とね。いや、違う。あくまで大事なのはチーム自体であり、彼らはチームの一員であるに過ぎないんだ。それをわかっていない相手には、もうかけるべき言葉はない。自分達が守ってきた価値観とプロフェッショナリズムのレヴェルを守らない連中が出てきたなら、こちらとしては「悪いがチームを離れてくれ」と丁寧に頼むしかないということだ。ただ、あのアルバムに関して言えば、とても気に入っているよ。今もコンサートで演奏するような楽曲があの中にも含まれている。"Psycho Circus"は勿論、他にも何曲も最高の曲がある。長く生き残った、時の試練に耐えたアルバムだと言っていい。

──当時、あのアルバムがもっとセールスを上げていたら、と考えることはありませんでしたか?

G:そういうことはないね。なにしろあの「DESTROYER」でさえ、"Beth"や"Detroit Rock City""God Of Thunder"といった曲が入っていたのに、当時のファンからすぐさま受け入れられたわけではなかった。時を経てようやく重要なアルバムだと認識されるようになったんだ。発売当初は「なんだ、この"Beth"って曲は? なんだ、このヴァイオリンは? なんでジーンは"Great Expectation"を少年合唱団なんかと一緒に歌っているんだ?」という具合にさんざんな言われようだった。しかし時が流れていくにつれ、「あれは名盤だ!」と言われるようになっていったんだ。物事には時間がかかることもある、ということさ。それ以上、なんと言えよう?

──ええ、それはわかります。ただ、ひとつ思うのは、当時あのアルバムがもっと大きなヒットになっていたなら、その後のKISSの物語は少しばかり違ったものになっていたのかもしれない、ということなんです。

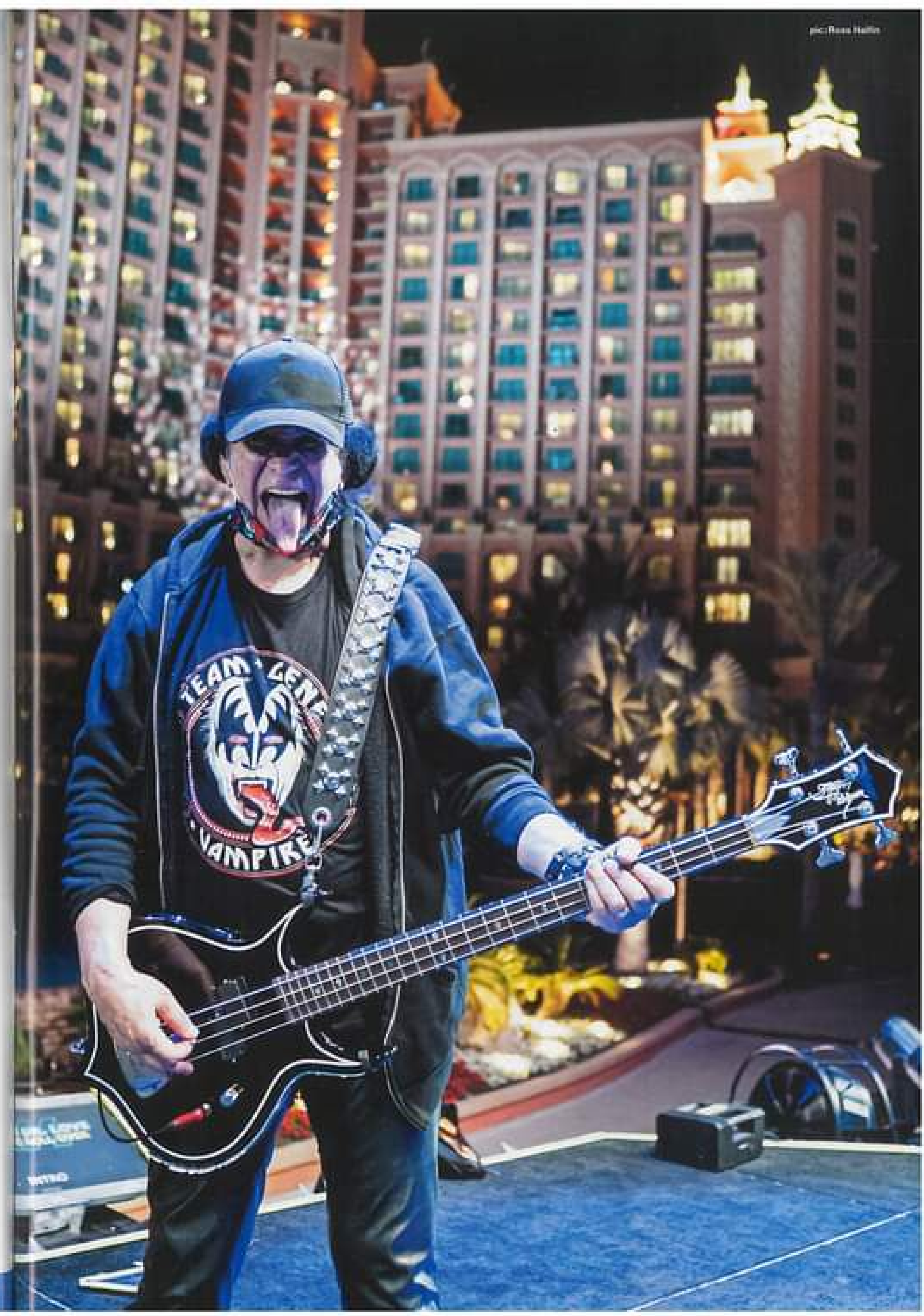
G:あのアルバムは、世界的レヴェルでは売れたんだ。ただ、重要なのは、レースの最中に、すでに起きてしまったことを肩越しに振り返っても意味がない、ということだ。常に顔は前に向け、まっすぐ先を見て、自分自身のベストを尽くさなければならない。もうすぐKISSの歴史も50年目を迎えることになる。47年、48年と続けてきて……どうだい? 私ときたらまだこんなにいい男なんだぜ!(笑いを誘いつつも真顔)

──つまり今も前を向いているからこそそうあれている、ということですね?

G:そう。今の私は何よりもツアーの再開を楽しみにしている。計画上は11月、オーストラリアとニュージーランドからの再スタートということになる。ただしワクチン接種を誰もが終え、安全が確保できたならば、という条件付きだ。そうなるよりも前に我々がどこかでライヴをやることはない。それによって誰かを感染させてしまうようなことは間違っている。KISSはこの先も続くだろう。あくまで我が道を進み続けるのさ。不満を言うやつらの言葉ばかりを聞いているわけにはいかないんだ。なにしろ不満を言うやつらというのは、時期を問わず常にいる。それは元メンバーだろうと例外ではない、ということさ。

──結果として、2000年から2001年にかけて実施されたフェアウェル・ツアーは、オリジナル・ラインナップとの決別の機会、新たなチャプターの始まりというような意味合いのものになったと解釈して良いのでしょうか?

G:そのとおり。それが正しい。オリジナル・メンバーであるエースとピーターが抜けるとなった時、ポールと私は「KISSを終えるべきなのだろうか?」と考えた。ただ、その次の瞬間に気付かされたのは、BEATLESにしたってリンゴ・スターは後任として加わったメンバーであり、その時点ですでにオリジナル・ラインナップではなかったということ。歴史に名を残す素晴らしいバンドの数々を思い出してみるといい。ROLLING STONES、AC/DC、METALLICA……。いずれもオリジナル・メンバーが揃ったままのバンドではないが、長きにわたり続い



pic:Ross Halfin

2020年の大晦日には「KISS 2020 GOODBYE」と銘打ち、アラブ首長国連邦のドバイにて巨大スケールの生配信ライヴを実施。リハーサル中のジーンの背後に見えるのは、会場となった高級リゾート・ホテル、「アトランティス・ザ・パーム」。このライヴの詳細については本誌3月号に掲載のリポートを参照のこと。

●●●●▶



pic: Ross Halfin

ネヴァダ州に引っ越したんだ。カリフォルニアは素晴らしい場所だが、地震はあるし毎年のように山火事が起き、パンデミックが追い討ちをかけた。しかも近々、税金が大きく引き上げられる。私の幸せは、住んでいる場所で決まるものではないからね。

できた。そのこと自体が、メンバー云々ではなくバンドが大切なんだということを伝えている。バンドというのは、たった1人のろくでなし、たった1人のドラッグ中毒患者のために台無しにされるべきものではない。たとえば車を運転中にタイヤがパンクしたなら、そこで停車して新しいタイヤに交換するだろう？　そうすることで、それまで以上の走りが得られるようになる。すり減って駄目になったタイヤはとっとと捨てるべきだということさ。

初体験の連続だったドバイでの年越しと、郷に従うことの意味。そして1977年、初来日時の記憶。

――さて、こちらとしてもツアーの再開には期待していますし、ここからは20年前のことではなく現在の話を聞かせてください。KISSは2021年の到来をドバイで迎え、新年早々、画期的な配信ライヴで話題を独占することになりました。僕も勿論観ていましたが、まさしく配信ライヴの常識を超えたものだったと思います。ご自身としては、いかがでしたか？

G：他にあり得ないほどの経験だった。「エミレーツ航空」の素晴らしい計らいにより、我々は、自分達のアパートをそのまま飛行機に乗せたかのような快適さでドバイまで飛んで行くことができた。クルー全員、化学防護服と手袋、マスクで全身を防護していたのも良かったね。ホテルもワンフロアを貸し切りにしていたから、宿泊中に外部の人間と接することも一切なかった。なにしろまだワクチン接種を誰も受けられていない段階でのことだったからね。実際のコンサートの間も、オーディエンスはごく少人数だった。1,000人ほどが距離をとった状態でその場に居たよ。それ以外の客はホテルの自室のバルコニーから、カジノ最大のステージを見下ろす形で観覧していたんだ。同時にコンサートの模様は全世界に向けてライヴ配信され、何百、何千万という人達がその様子を目撃することになった。しかもギネスブック関係者も立ち会いのもと、最大級の花火、火柱だという記録達成も公認された。歴史上、あれ以上の火柱が立ったことがあるとすれば、世界大戦の時くらいのものだろう。(笑)

――その喩えはともかく、すごい様相だったのは間違いありません。ただ、宗教上・文化的な理由からか、"God Of Thunder"ではお馴染みの血を吐くパフォーマンスができず、この曲を含むいくつかの曲では歌詞の一部変更を強いられることになりましたよね？

G：ああ。現地の関係者は皆とても良くしてくれた。ただし「申し訳ないが文化の違いだ。これはやめておいてもらえないだろうか？」と言ってきたんだ。だからこちらも「わかった。それで問題ない」と先方の言い分を飲むことにした。国によっては、"F"で始まるあの言葉をはじめ、四文字言葉を言いたいだけ言える場合もあるが、それが駄目な国もある。そういう時は相手へのリスペクトという意味において、やらずにおくんだ。

東京の武道館(註：ジーンはこの会場名を英語風のアクセントではなく、日本人と同じ発音で口にする)で初めてプレイした時(=1977年)、BEATLESの連続公演、動員人数の記録を破った当時も、会場の通路にはジャーマン・シェパードを連れ、ピストルを持った警官が行ったり来たりしていることに気付かされたものだ。観客には、立ち上がることが許されていなかった。だから皆、席に座ったまま、曲が終わるとお行儀良く拍手をするという具合でね。我々は「どうなってるんだ？　まるで盛り上がってない、誰もクレイジーになってないじゃないか！」と困惑させられたものだけども、70年代半ば、日本では文化的に、狂ったように騒ぐことが許されていなかったのさ。ただ、その後は警官やジャーマン・シェパードの姿もどこかに消えていなくなった。ロックン・ロールはさまざまなトラブルを引き起こすものだと思われていたが、それは間違いだということが理解されたからだ。逆に、若者達にとってそれ以上のものはない、エネルギーを発散させるもの、という意味においてね。

――ええ。ところで、ドバイでの素晴らしいライヴ・パフォーマンスについては、映像作品化する予定もあるはずですよね？

G：ああ、勿論。現在、そのDVDやライヴ盤制作に向けての準備を進めているところで、年内には出せる予定だ。なにしろあれは、この地球上で行なわれた最大級のパーティだったんだ。あれ以上のパーティというのは未だかつてなかった。いろいろなパフォーマーが、いろいろな場所からライヴを配信してきたが、ドバイという土地から大晦日に、しかも世界中の何百万という人間に向けてそれを届けたのはKISSだけだ。あれは、なかなかのものだった。しかも安全に行なわれていたわけだからな。

――そこも重要ですよね。話は変わりますが、あなたご自身、今現在はどこにいらっしゃるんですか？　最近、長年住み慣れたロサンゼルスの豪邸売却のニュースが報じられていました。ワシントン州への移転を検討しているとの話も。

G：その情報は正しくないな。私はカリフォルニア州の隣に位置するネヴァダ州に引っ越したんだ。カリフォルニアは美しくて素晴らしい場所だが、地震はあるし、毎年のように山火事が起きる。パンデミックがそこに追い討ちをかけた。さらには近々、税金を大きく引き上げることになっていてね。それならば隣の州に引っ越そうじゃないか、ということだよ。同じように生活するにしても、そのほうが暮らしやすい、というわけで、私が今居るのは新居だよ。

――実際、ネヴァダ州に転居予定だとのニュースも読みましたよ。レイク・タホでしたよね？

G：そうかもな。(笑)　ネヴァダ州とだけ言っておくことにするよ。

――あなたは何事においても計画的な方ですよね。ロサンゼルスを離れることを決めたのも、この先の新たな人生プランを考えてのことなのだろうと受け止めていましたが。

G：そういうわけでもない。私にとっての人生のプランは、生きている限り、毎日を良い日にするというだけ。どこに住んでいるかは関係ない。私の幸せは、家やダイヤモンドや住んでいる場所で決まるものではない。私にとっての幸せは、心の声に従うこと、自分に嘘をつかないこと、家族の面倒を見て、ファンを幸せにすること。それはいくら金を出しても店では買えないものだ。不動産なら買えるがな。家でさえ金で手に入る。しかし愛は買えやしない。

――ええ。ただ、すでにKISSでの活動の終末を見据えているあなたとしては、その先の人生に向けて考えていることというのもあるのでは？

G：そうだな。現在は暗号通貨とDeFi(分散型金融)、NFT(代替不可能なトークン、デジタル資産)に関心を持っている。今の話を聞いて、何のことだかわからないならば、調べてみる価値はあるよ。暗号通貨というのは一種のビットコインだ。ビットコインは知ってるだろう？　何千とあるビットコインのひとつなんだ。DeFiもNFTもそのすぐ隣に住む隣人のようなものだが、今、その領域が急成長を遂げている。とても興味深く面白い世界だよ。私にとっては。

――なるほど。たとえばポールにとってのSOUL STATIONのように、KISSを離れた形での音楽活動の計画などは抱えていないのでしょうか？

G：あれは素晴らしいアルバムだった。ポールは本当によくやったと思う。レコード会社があろうがなかろうが関係なく、やりたいことを貫いた。ポールの歌も最高だし、バンドも素晴らしい。さっきも言ったように、KISSは独自のやり方でやりたいことをやるんだ。ルールについて心配したりはしない。私も将来のいずれかの時点で、何かをやるかもしれない。ただしKISSを離れた形で、というのではないかな。たとえば以前に出した「VAULT」(2017年に発売されたジーン個人の音楽史集大成的な高額商品)のような何かだ。あれは史上最大級のボックスセットだった。中にはBEATLESのデモのような、KISSとはまた全然違う曲もあった。VAN HALENの兄弟も、AEROSMITHのジョー・ペリーも入っていた。そういったものが、これからも続々と出てくることになるだろう。映画の話もある。漫画の番組の話もね。新しいことはまだまだある。

いまだ見えぬロードの終着点と「最後のジャパン・ツアー」が最後ではなくなる可能性。

――最近、あなたが何年も前に口にしていた「ロックン・ロールは死んだ」という言葉がふたたび取り沙汰されていますよね。近年、ロック・バンドとして活動していても、配信主体のこの世の中ではろくに収益に繋がらず、若者達が根気良く活動を続けていくことができなかったり、夢や野望を持ちにくくなっていたりするのは事実だと思いますし、あなた

心惹かれる新人バンドがいたなら、それが誰でもいいから、無料でダウンロードするんじゃなく、買って聴いて欲しい。KISSの話をしているわけじゃない。好きになったバンドが生き残るのに手を貸せ。彼らはチャリティでやってるんじゃない。

がそうした状況を指して「死んだ」と言っていることも理解しているつもりです。ただ、若い世代が求めているのは、そうした絶望的な言葉ではなく、助言だと思うんです。

G:いや、これはどうしようもないことで、彼らに対してできることは何もない。何故かといえば、今やレコード会社というものが無いのも同然だからだ。勿論その言葉自体は残っているが、今の時代、ファンは音楽を無料でダウンロードして聴いている。正確にはタダ同然、と言うべきかな。新人アーティストが登場し、曲が一度ダウンロードされたりストリーミングで試聴されたりしたところで、1ペニーの千分の一ぐらいしか金が入ってこないんだ。そんな状況ではバンド活動が成立しないから、みんなアルバイトをするしかなくなり、そうなってくると今度は自分達のアートのために注ぐべき時間が失われてしまう。それが第一の悲劇だ。彼らには心から同情するよ。第二のYOSHIKIもX JAPANももう出てきはしない。それはレコード会社が機能しておらず、もっと言うならばファンが音楽に金を払いたがらず、無料で聴くことが当たり前になっているからだ

——どうすればそのような状況を変えられるのだと思いますか?

G:簡単なことだ。政府が法案を通せばいいだけの話さ!(笑) 無許可で、支払いなしに何かをダウンロードするやつをみつけたら、そいつの家を差し押さえればいい。そうすれば、すぐにやめるだろうよ。赤ん坊は火が熱いものだとはわからず、火の中に手を突っ込んでしまう。そこで火の側は、赤ん坊が何も知らないことなどお構い無しに、火傷を負わせてしまう。結局、そうやって痛い目に遭わないと人間にはわからないんだ。人間は、それが良いか悪いかではなく「みんな平等に扱え!」ということばかり言いがちだ。そして、それがどんなに大変な法案だとしても通さなければならなくなる。今、失われているのは第二のBEATLESに当たる世代だ。もしくはTHE YELLOW MONKEY、B'zと言い換えてもいい。もう彼らのように売れるバンドは出てこないよ。音楽だけをやっていては生計を立てられないからだ。毎日必死に生活のために働き、その仕事で忙しくしているから、バンドをやっている暇などないんだ。だからきっと、SOUTHERN ALL STARSみたいなバンドを作ろうとする人間もいなくなってしまう。さあ、どうする?

——……、KISSのようなバンドも、ですか?

G:KISSの場合は、将来も違う形で存続していくことだろう。4人の若いミュージシャンがメイクをしてね。(笑) ただ、KISSの場合はラッキーだった。レコードだけに頼っていなかったからだ。どんな時代にもコンサートをやってこられたし、何千もの玩具やゲームがあったし、映画やアニメ番組まで作ることができる。ところが今の時代、これから新たに何かをしようとしているバンドには、それができない。

——なるほど。ところで先程、ツアー再開はオーストラリアから、という話が出ましたよね?

G:ソウデス。(日本語で)

——「END OF THE ROAD」と銘打ちながら実施されていたこの最終ツアーは、パンデミックがなければ今年の7月、ニューヨークで幕を閉じることになっていたはずです。現状、新たな"最後の日"はすでに決定しているのですか?

G:まだわからない。今、話が進んでいるんだが、世界各地、何百という都市に赴くことになりそうだ。KISSはまだ、中国では一度もライヴをやったことがない。モンゴルでもね。(笑) 世界にはいくつか、そうしたKISSにとっての未踏の地がある。中東方面についてもそうだ。イスラエル、サウジアラビア、エジプトにも行ったことがないし、インドもそうだ。今度こそ、そうした国々でやるのに良い時期が訪れることになるのかもしれない。そして最後のショウについては……私自身の想像の中では、南極あたりでやるのがいいんじゃないかと考えている。あそこなら、上空を飛ぶ飛行機や、周囲の建物への騒音の影響も心配せずに済む。空に向けてドカンと打ち上げて、氷を溶かすのさ。(笑)

——それは危険過ぎますよ。(笑) で、その模様を生配信するというわけですか?

G:そういうことだ。氷が解けて、最後はKISSが海に沈んでいき、そこで終わる。

——その話が冗談か本気かはともかく、オーストラリアとニュージーランドを予定どおり巡演できるのであれば、その前後あたりにもう一度日本に来られる可能性もあるのではないですか? 正直、それを期待したくなるところではあります。

G:そうできたならいいね。私は日本を愛している。これは冗談ではないよ。なにしろKISSは君が生まれる前から日本に行っているんだ。

——前にも同じことを言われましたけど、僕はそこまで若くはないですし、初来日公演も観ていますよ。

G:そうか。(笑) だから……そう、行き続けるとも。当然のことだ。

——できることならKISSには、こうした混乱した状況下で「規制に則りながら、安全最優先でありながらもエキサイティングでエンターテイニングなロック・ショウが可能であること」の手本を示して欲しいものです。

G:これまで以上に大きく、より良い音楽を届ける。ファンの心とドルに応えていくよ。つまり、「これだけ払っても、来て良かった!」と思えるものを提供するということだ。ただ、我々のやっていることというのには非常に金がかかる。だからKISSのやり方は大概のバンドにとっては手本になり得ないだろうけどもね。それはともかく、大切なのはコンサートを観に来る人達は本来そこに居なくてもいいはずの人達だということ。それを忘れてはならない。つまり、そこに来させた以上は、彼らが生涯忘れられないようなものを提供する責任を持て、ということだ。しかも毎晩、どの場所でもね。今日は調子が悪いから、というのは言い訳にはならない。プロフェッショナルじゃない人間は、ステージに立たずに家に帰れ。そのステージに上がるチャンスを別の誰かに譲るべきだ、ということさ。

——ごもっともです。さて、そろそろ時間のようです。最後に、ロックン・ロールはまだ死んでなどいないと信じているはずの読者に向けて、メッセージをいただければと思います。

G:いや、やはり死んでいる。証明してやってもいい。1958年から1988年までの30年間、その経過のあいだにエルヴィス・プレスリー、BEATLES、ROLLING STONES、ジミ・ヘンドリックスをはじめ、その他何千というバンドが登場してきた。マドンナ、U2、AC/DC、METALLICA、デイヴィッド・ボウイ、プリンスの名前も挙げるべきだろうし、SOUTHERN ALL STARSもそこに加えるべきかもしれない。モータウンなどの音楽もそうだし、いずれも永遠に残るべきものだ。しかし1988年から今日に至るまでの間に、BEATLESに匹敵する者が出て来ただろうか? 第二のエルヴィスはどこだ? 90年代の後半になるとNapsterなどが出てきて、無料ダウンロードや違法なファイル共有の問題も始まった。そこでバンドは死んだんだ。

勿論、今も才能ある若者は大勢いる。ただ彼らには、KISSが過去に与えられてきたようなチャンスはもたらされないんだ。当時はまず、レコード会社が我々に金を払ってくれた。ツアーのサポートすらしてくれた。だからこそ我々はアルバイトをすることもなく、アートだけに専念することができた。ただ、そうした日々というのはもう過去のものなんだ。今の若者達にチャンスがないのはそのせいだ。ロックは死んだ。誰がロックを殺したのか、わかるか? 他ならぬファンだ。

——そうしたファンに対して言いたいことは?

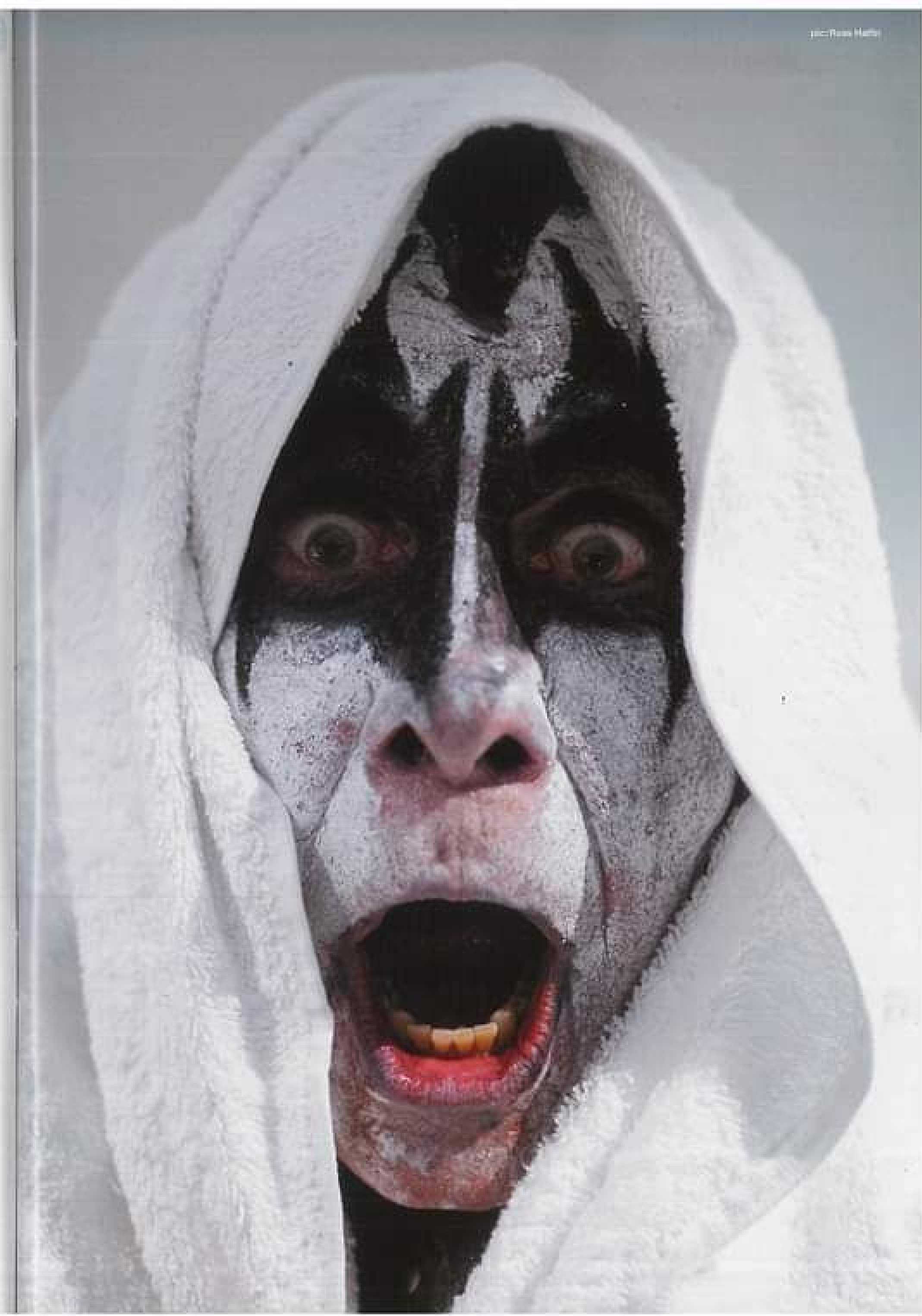
G:おまえの地元で活動するローカル・バンドを応援しろ、金を払って音楽を買え、ということだな。ダウンロードで済ませるのではなく。私はKISSの話をしてるんじゃない。良いな、と思う新人バンドがいたなら……たとえばそれがTAME IMPALAでも誰でもいいから、無料でダウンロードするんじゃなく、買って聴いて欲しい。自分が好きになったバンドが生き残るのに、手を貸せ。彼らはチャリティでやっているんじゃない。仕事で音楽をやっているんだ。

——今日はお時間をいただき、ありがとうございました。

G:(待ってましたとばかりに間髪を入れず日本語で)ドウイタシマシテ! 身体を大事にしろ。ワクチンはもう打ったのか?

——いいえ、まだなんです。残念ながら日本ではワクチンの対応が遅れているんですよ。あなたはもうすでに接種済みなんですよね?

G:ああ、二度打った。家族全員打ったよ。とはいえ、それでもまだ気を付けねばならない。マスクはしなくちゃ駄目だ。ああ、でもニッポンでは大昔からマスクが使われていたからな。日本の人達は、日本が持っているかもしれない菌を他の誰かにうつしてしまわないようにマスクを着用する。それは良い習慣だ。日本の友人達みんなによろしく伝えておいてくれ。また会おう、とね。 ■■



pic:Ross Halfin

再検証：
2001年のKISSが迎えた「最初の終焉」と「ALIVE!」の真意。

by YOU MASUDA



KISS in 2001 pic:Hiroyuki Yoshihama
KISS in 2001：写真協力：YOUNG GUITAR





▲2001年3月13日、KISS史上2回目となる東京ドーム公演が実現。この時点ではまさか3回目、4回目があるとは誰も想像していなかったことだろう。



▲滞日中、ジーンは自身の手によるリトグラフ作品販売やそれに伴う記者会見なども実施。一方、ポールは息子のエヴァンと観光や買い物を楽しんでいた。

KISSの新たなライヴ・アルバムが登場する。そう聞いた読者の多くは、2020年の大晦日にドバイで実施された前代未聞のスケールによる配信ライヴの際の音源が作品化されるものと想像したのではないだろうか。実際、緊急取材に応じてくれたジーン・シモンズ自身が認めたところによれば、そちらについても調整が進んでいて年内には届けられることになるようだが、今回作品化されることになったのは、なんと20年前の音源である。

この「OFF THE SOUNDBOARD：TOKYO 2001」は、タイトル自体からも明らかであるように、2001年に行なわれた東京公演の模様が収録されたライヴ・アルバムだ。もっと具体的に言うならば、「THE FAREWELL TOUR 1973-2001」の一環として同年3月9日から22日にかけて実施されたジャパン・ツアー中に実現した、KISS史上2回目の東京ドーム公演の際の音源ということになる。

当時の演奏内容は、P.15に収録予定曲として掲載されているリストどおりだ。集大成的でありながら、例えばエース・フレーリーが歌う"Talk To Me"などが盛り込まれているあたりはなかなか貴重と言えるのではないだろうか。また、シングルにこそなっていないが80年代の彼らのライヴに欠かせなかった曲のひとつである"I Still Love You"の存在も見逃せない。「CREATURES OF THE NIGHT」（1982年）に収録されていたこのロック・バラードは、ポール・スタンレーが、同作の次のアルバムにあたる「LICK IT UP」（1983年）から正式加入することになるヴィニー・ヴィンセントと共作したものだ。

2001年のジャパン・ツアーは、ある意味とても特殊なものだったと言わざるを得ない。インタビュー記事中でも触れているように、本来ならばオリジナル・ラインナップ復活後初のオリジナル作である「PSYCHO CIRCUS」（1998年／全米3位）に伴うツアーの一環として日本上陸が計画されていたはずなのに、その前に同ツアーが「THE FAREWELL TOUR 1973-2001」に切り替えられてしまったのだ。KISSは1996年にリユニオンを果たし、翌1997年には日本公演も行なわれているが（この際にKISS史上初となる東京ドーム公演が実現している）、あの4人からなるKISSとの再会を祝うツアーから4年後には、いきなりフェアウェル、つまり別れの機会が訪れてしまったというわけだ。

しかも、この来日公演を前にピーター・クリスが脱退。2001年からの活動に向けて契約更改する意向のなかった彼は、2000年10月7日、同年の北米最終公演で"Beth"を披露する際、すでに「これを歌うのは今日が最後だ」と発言していたりもするが、その脱退が公式に発表されたのは年が明けてからのことだった。そこで急遽、呼び戻されたのがエリック・シンガーだった。

フェアウェルをテーマとするツアーだというのに、土壇場でオリジナル・メンバーの1人を欠くことになったのは、さすがのKISSにとっても計算外だったはずだ。ただ、このアクシデントが彼らに「オリジナル・コンセプトを貫きぬかず、違う顔ぶれでKISSのライヴを成立させることが不可能ではないこと」を実感する機会をもたらすことになった。フェアウェルという言葉の持つ意味合いが変わることになった、と言ってもいいだろう。モノの見方としてはだいぶ歪んでいるかもしれないが、あの時にピーターが再離脱し、戦列を離れることがなければ、KISSの物語はもっと早々に終焉を迎えていたのかもしれない。

とはいえ興味深いのは、ポール、ジーン、エースにエリックという顔ぶれによる日本公演が、この機会以降には一度も実現していないことである。言うまでもなく、このツアーを最後にエースが脱退しているからだ。しかも想定外なことに、再契約の意向がなかったはずのピーターが復帰。彼らはそこで、過去にも単発的にエースの代役を務めた経験のあったトミー・セイヤーを起用し、2003年2月、オーストラリアはメルボルンでの「KISS SYMPHONY」公演（メルボルン交響楽団との共演によるもの）に臨み、その歴史的一夜を経たうえで同年3月には日本上陸。この国のファンは2001年にKISSの終焉を目撃し、別れの挨拶を交わしたはずだったが、それから2年後には打たれていたはずの終止符があっさりと消去されていたのだった。

KISSの「説明なき継続」については、当初こそ非難めいた声もそれなりに聞こえてきたものだが、ピーターが三度目の脱退に至った頃には、誰もが解散ではなくエリック再加入を予感するようになっていたはずだし、実際、彼とトミーを擁する布陣になってからのKISSの活動は、それまで以上にコンスタントで、不協和音の伴わないものになっていった。日本公演についても過剰にブランクを設けることなく重ねられ、結果、1977年の初来日時から2019年12月、「END OF THE ROAD」の一環としてのツアーまで、彼らは42年間のあいだに実に計12回にわたりこの国を訪れてきた。母国であるアメリカでの総公演本数とは比べものにならないが、間違いなく日本はKISSに愛されてきた国のひとつだと言えるだろう

さて、話を今作のことに戻そう。

今、この時期に、20年前の東京ドーム公演のライヴ音源がアルバム化されることについては、実のところ特に深い意味や意図はないようだ。ジーンの「録音されていることすら知らずにいた」「せっかくの音源をブートレッグ業者に出させるくらいだったら自分達で合法的にリリースしてやれ、ということになった」といった言葉に嘘があるとは思えない。ただ、ここでひとつ注目したいのは「OFF THE SOUNDBOARD：TOKYO 2001」というタイトルと、KISS作品にしては珍しいほどシンプルな装丁になっている事実についてだ。いかにも今後、このフォーマットでシリーズ化されそうな匂いが漂ってくるではないか！

たとえばMETALLICAやPEARL JAMも、大量のライヴ音源を、オフィシャル・サイトを通じて販売している。METALLICAのオフィシャル・ストアを覗いてみるとLIVE METALLICA CDsという商品ページがあるし、PEARL JAMの場合はもっと露骨にBOOTLEGSというページが設けられていたりする。もしかすると今後、KISSも同様に過去の未発表ライヴ音源を続々とリリースするつもりでいるのかもしれない。

遠い昔、「ALIVE!」（1975年）、「ALIVE II」（1977年）に続くライヴ・アルバムを彼らがなかなか出さずにいた当時、その理由について彼ら自身が「ライヴ・アルバムは時代に合わない」「今はむしろ映像の時代だから」などと説明していたことを記憶している。しかし、インターネットの普及などによりライヴ映像すらも当たり前のものになっている今の時代、CDの売り上げ全体が減少傾向にあるのに対しレコードがもてはやされるようになっているのと同時に、無編集で映像の伴わないオフィシャル・ブートレッグというものは、収集癖のあるマニアの心をくすぐるアイテムとして有効と言えるのかもしれない。

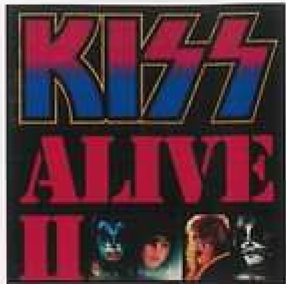
今作を正式なライヴ・アルバムと捉えるか、ブートレッグに近いものと解釈するかはともかく、KISSのサクセス・ストーリーがライヴ・アルバムと関係の深いものであることは今さら説明するまでもない。「KISS」（1974年）、「HOTTER THAN HELL」（1974年）、「DRESSED TO KILL」（1975年）という初期3作がたいした実績に結びつかず、アルバムを制作し、ツアーをするほどに借金ばかりがかさんでいたKISSにとって、その3作を経たのちにリリースされた「ALIVE!」は、まさに起死回生のヒット作となった。ちなみに前出の3作の、「ビルボード」誌による全米アルバム・チャートでの最高ランキングはそれぞれ87位、100位、32位だが、この「ALIVE!」は最高9位を記録している。アルバム・セールスは伸びないのにライヴの動員だけは増えつつあった彼らの魅力を、それまでのどの作品よりも生々しく、しかもストレートにわかりやすく伝えていたのがこの2枚組ライヴ・アルバムだったのだ。

1970年代を代表するロックのライヴ作品としては、同様に2枚組としてリリースされ、全米アルバム・チャートで計10週にわたり首位を独占したピーター・フランプトンの「FRAMPTON COMES ALIVE!」（1976年）がある。彼もまたこの作品の大ヒットにより世の広い認知を獲得しているが、「ALIVE!」が発売されたのはその前年のことだ。また、日本からの最高の輸出品のひとつというべきCHEAP TRICKの「AT BUDOKAN」が正式にアメリカでリリースされ、ヒットしたのは1979年のことだ。こんな指摘をすればおそらくジーンは腕組みをしながら「そう、我々のほうが先だった」とドヤ顔をしてみせることだろう。実際、彼らは「ALIVE!」のヒットなしには短命に終わっていたかもしれないし、同作に続いた「DESTROYER」（1976年／全米11位）のような手の込んだアルバムを充分な予算をかけながら作ることも叶わなかったはずだ。

その後、KISSは、まるで勝利の法則にしたがうかのように、「DESTROYER」、「ROCK AND ROLL OVER」（1976年／全米11位）、「LOVE GUN」（1977年／全米4位）という3枚のオリジナル・アルバムを経て、「ALIVE II」（全米7位）を発表している。名実ともに当時を代表する人気バンドとなった彼らのライヴが格段にスケールアップを遂げていることが、映像無しでも存分に感じられる画期的な作品だ。



ALIVE!
1975年



ALIVE II
1977年



ALIVE III
1993年



MTV UNPLUGGED
1996年



YOU WANTED THE BEST, YOU GOT THE BEST!!
1996年



KISS SYMPHONY:ALIVE IV
2003年

ただ、第4作以降の3作品からの楽曲だけで前回と同様の2枚組ライヴ・アルバムというフォーマットで成立させることには、やや無理があった。KISSのライヴには初期からの鉄板曲が多く、新作アルバムに伴うツアーでも新曲が数曲しか披露されないことにファンも慣れてしまっているが、そうした傾向はすでにその当時からあったのだ。今にして思えば「ライヴ・アルバム収録のための、第4、5、6作からの楽曲限定ライヴ」でも実施すれば良かったのではないかとも思えるし、それもまた話題作りに繋がったのではないかという気がする。とはいえ、結局、2枚組LP全4面のうち最後の1面をスタジオ録音による楽曲群を配置するという変則的な構成をとることで、エースが歌う代表曲のひとつである"Rocket Ride"や、意外なルーツを匂わせる"Anyway You Want It"のカヴァー(オリジナルはDAVE CLARK FIVE)といった重要なトラックが生まれることにもなったわけだが。

その後、「ALIVE III」(1993年/全米9位)がなかなか出なかったのは、単純に、前述のとおり1980年代がビデオの時代、ラジオからMTVへと主導権が移った時代だったからでもあるだろう。加えて、翌年にデビュー20周年という大きな節目の到来を控えていたこともあり、それを記念した動きとの兼ね合いなども考慮されていたことだろう。"Creatures Of The Night"で幕を開けるこの作品には、ブルース・キューリックとエリック・シンガーが配された布陣、つまりアルバムで言えば「REVENGE」(1991年/全米6位)期のライヴ・パフォーマンスが収録されているが、この時代の演奏がいかに高い次元で安定していたかを実証するものだと言える。

その次に届けられた公式のライヴ・アルバムは「MTV UNPLUGGED」(1996年/全米15位)だった。言うまでもなく、MTVのスペシャル・プログラムとして実施されたこのアンプラグド・ライヴにエースとピーターがゲスト参加したことが、オリジナル・ラインナップ復活への布石というかイントロダクションとなったわけである。

そして、リユニオン・ツアーの開幕と合わせて発売されたのが「YOU WANTED THE BEST, YOU GOT THE BEST!!」(1996年/17位)だ。これは、いわゆる編集もののライヴ作品ではあるものの、オリジナルKISSの復活を印象付け、リユニオン祝福ムードを盛り上げるうえで実に有効なアイテムだったと言える。リユニオン・ツアーを観に行くまでにこのアルバムで復習した、あるいはライヴを観た記念にこの盤を手に入れた、という人も少なくないはずだ。

そして4枚目の「ALIVE」は意外な形で届けられることになった。この作品の正式タイトルは「KISS SYMPHONY: ALIVE IV」(2003年/全米18位)であり、2003年にメルボルンで実施された前述の「KISS SYMPHONY」公演の模様が収録されているのだ。しかも結果的にはこのアルバムこそが、トミーにとって初の参加作となった。

「OFF THE SOUNDBOARD: TOKYO 2001」は、収録時期的にはその「ALIVE IV」のひとつ前のライヴ作品ということになる。こうして時間の流れについて改めて考えてみた時、ふと思うのは、「MTV UNPLUGGED」や「YOU WANTED THE BEST, YOU GOT THE BEST!!」といったリリースの流れから考えて、当然ながら彼らはリユニオン・ツアー、もしくは「PSYCHO CIRCUS」(1998年/全米3位)発表後のツアーを完全収録したライヴ作品を出すことを考えていたはずだということ。そもそもはそれが「ALIVE」シリーズの第4作になるはずだったのではないか、とも思えてくる。

もっと言うならば、当時から彼らのクルーが「安全のためにすべてのライヴを録音していた」ことについても、リユニオン時のライヴ音源を作品化することを前提としていたからだと考えると、結構につじつまが合う。ただ、そうした計画が仮にあったとしても、ピーターとエースが相次いで再脱退することになるとは、ポールとジーンの側も想定していなかったことだろう。結局、彼らはリユニオン時の音源で「ALIVE IV」を作ることができず、本来のKISSのライヴとは違った意義をもった特例的な一夜の模様を収めたものが、シリーズ第4作となったわけである。

さて、ここで気になるのは「ALIVE V」が、いつ、どのような形で世に出ることになるのか、ということだ。物事の流れから想像できるのは、たとえば「END OF THE ROAD」を総括するもの、もしくはそのツアーの最終公演の模様を収めたものが、由緒あるこのタイトルの下で制作されることになるのではないか、ということ。そしてもうひとつ予測できるのは、そうした記念碑的ライヴ作品が出ることになる前に、この「OFF THE SOUNDBOARD: TOKYO 2001」のような音源が、続々登場することになるのかもしれない、ということだ。

逆の言い方をすると、おそらく「ALIVE V」は同タイトルのシリーズ最終作ということになるのだろうし、それが世に出る時に本当にKISSは終焉を迎えるということになるのかもしれない。同時に感じさせられるのは、彼らがこの"ALIVE"というワードをいかに大切にしているか、ということだ。長い間、ヒットになかなか恵まれず、不遇の時代を過ごしていたKISS。コンセプト倒れで終わってしまい兼ねなかった彼らにとって、「ALIVE!」はそのタイトルが示すように、彼ら自身が生きていることを証明するかのような役割を果たすことになった。まるで死んでいるのも同然のような状況下でのライヴ・アルバム発表は、まさしくイチかバチかの賭けだったと言える。

2021年の現在、ジーン・シモンズはロックン・ロールが生き続けていることを認めようとしない。その真意については今回のインタビューでも語られているとおりだし、それは、若い世代のミュージシャン達を否定・攻撃するものではない。ただ、仮にレコード会社が単なる窓口に過ぎない存在になったとしても、音楽ビジネスが廃れ、業界の景気が悪化の一途を辿ることになろうとも、その時代ならではのロックン・ロールを鳴らす者達は確実にいるはずだし、ビジネスが滅んでもアートは不滅なのだと信じたいものだ。

おそらく彼ら自身も、最初の3作ではとんど世の反応を得られずにいた頃は、「業界は終わっているが、俺達は最高だ!」と信じていたに違いない。そんな彼らの信念と、彼らに共鳴する若者達の情熱が封じ込められた作品だったからこそ、「ALIVE!」は彼らに命を与えることになったはずなのだ。ジーンの一連の言葉は、こうした状況の中から抜け出そうとしている者達に向けての逆説的エールなのだと、僕は信じている。

それにしても喜ばしいのは、KISSを愛し、KISSに愛されてきたここ日本で収録されたライヴ・アルバムが、こうして正式に世に出ることになった事実だ。この作品には当然ながら「コンバンワ、トーキョー!」「ミナサン、ハクシュ!」といった日本公演ならではのMCの数々もカットされることなく収録されている。ポールの発した「アナタハ、ウツクシイ」という言葉に対する日本のファンの笑い声も。

もしも本当にこのオフィシャル・ブートレッグがシリーズ化されることになるのであれば、他の時期、他の場所での日本公演の音源が作品化される可能性もあるかもしれない。また、そうこうしているうちにドバイでの年越しライヴの作品化も進むことだろうし、ジーン自身も望んでいる以上、日本のファンがふたたびKISSのライヴ・パフォーマンスと対峙できるチャンスがそう遠くないうちに巡ってくる可能性もないとは言えない。ただし彼が明言しているように、その実現のためには日本人すべてがワクチン接種を終えた状態が整っていることが不可欠ということになるはずだが。

日々、刻々と状況は変わり続けている。そしてKISSの視線は、すでにその状況が変わった先の世界をとらえ始めている。KISS、ロックン・ロール、そしてすべてのロック・ファンが、その時に「ALIVE」という言葉の意味を噛み締めることになるのではないだろうか。その瞬間の到来を信じながら、次に何が起きるのかを楽しみにしていたいところである。



OFF THE SOUNDBOARD: TOKYO 2001

ユニバーサル　6/11発売予定

【収録予定曲】

DISC 1
①Detroit Rock City ②Deuce ③Shout It Out Loud ④Talk To Me ⑤I Love It Loud ⑥Firehouse ⑦Do You Love Me ⑧Calling Dr. Love ⑨Heaven's On Fire ⑩Let Me Go Rock 'N' Roll ⑪Shock Me/guitar solo ⑫Psycho Circus

DISC 2
①Lick It Up/bass solo ②God Of Thunder/drums solo ③Cold Gin ④100,000 Years ⑤Love Gun ⑥I Still Love You ⑦Black Diamond ⑧I Was Made For Lovin' You ⑨Rock And Roll All Nite

【緊急告知】来月号にはポール・スタンレーが「OFF THE SOUNDBOARD: TOKYO 2001」を語る独占インタビューも掲載予定。お楽しみに!